

カウンターカルチャーのアメリカ 第2版  
—希望と失望の1960年代—

---

目 次

序 章	社会的安定と不安定のはざまに生まれたカウンターカルチャー……	1
	公民権運動	3
	キューバ危機、ヴェトナム戦争	4
	ブラック・パワー	5
	科学の時代	6

## 第1部 カウンターカルチャーの誕生

第1章	解放のメタファーとしてのロック音楽 ……………	14
	ロックの誕生	14
	レコーディング技術の進歩	16
	ロックとカウンターカルチャー	17
	グレイトフル・デッド	19
	身体性の重視	21
	ビル・グラムのロック・ビジネス	21
	ジェンダー、人種の融合	23
	ジャニス・ジョプリン	26
	白人としての黒人ヘンドリックス	27
	まとめ	31
第2章	自己回復手段としてのLSD ……………	33
	サンフランシスコにおけるLSDの普及	34
	トリップス・フェスティバル	36
	東海岸におけるLSD	38
	『オラクル』創刊、サイケデリック・アート	39
	『タイム』誌の記事	40
	LSDの歴史	41
	精神を人為的に変える	42
	ペプシ・コーラの広告戦略	44

1963年はLSD文化の分岐点	45
LSD非合法化	47
バナナ・デマ	49
LSD卒業記念パーティー	50
まとめ	51
<b>第3章 フリー、ストリート・シアター、イッピー</b>	
——革命という名の演劇	54
サンフランシスコ・マイム・トループ	54
ディッカーズ誕生	58
ヒッピーの経済学	61
イッピーズ	63
まとめ	65
<b>第4章 共同体的に生きる</b>	
——コミュンという静かな革命	66
コミュンの実際例1：『ライフ』誌から	68
コミュンの実際例2：『ランパーツ』誌から	69
コミュンを可能にした外部的条件	71
エコロジー意識の形成	72
ブランド『ホール・アース・カタログ』	74
コミュンの難しさ	76
例外的に長続きしたコミュン	79
アメリカ史におけるコミュン運動	80
まとめ	82
<b>第5章 禅、ヘッセ、ヨガ</b>	
——東洋をとおしてアメリカを見たヒッピーたち	84
ビート・ジェネレーション	84

ビートルズとインド	86
ヘルマン・ヘッセ	88
戦後アメリカとアジア文化とカウンターカルチャー	91
大学という環境	92
革命ヒーローとしての毛沢東	95
LSD から禅、瞑想へ	96
まとめ	98

## 第2部 関係されるカウンターカルチャー

第6章 インディペンデント・シネマに描かれたヒッピー世代の挫折 …	102
『イージー・ライダー』	102
『卒業』	105
『ミッドナイト・カウボーイ』	107
『俺たちに明日はない』	111
インディペンデント・シネマの誕生	113
反体制的な体制遵守としてのインディペンデント・シネマ	115
まとめ	116
第7章 タイプライターで体制を揺さぶる	
——ニュー・ジャーナリズムの誕生 ……………	117
ハンター・トンプソン『ヘルズ・エンジェルズ』	119
トム・ウルフ『クール・クール LSD 交感テスト』	120
ジョアン・ディディオン「ベツレヘムに向かってたらだらと」	121
ニュー・ジャーナリズムの文体	122
ニュー・ジャーナリズム作家のキャリア形成	124
ゲイ・タリーズ『汝の父を敬え』	126
トルーマン・カポーティ『冷血』	128
ノーマン・メイラー『夜の軍隊』	130

『ローリング・ストーン』 132

『ニューヨーク』 133

まとめ 135

## 第8章 パーソナル・コンピューターの黎明

—— 1970年代に引き継がれたカウンターカルチャー …… 138

ARPA、ARPANETの誕生 140

ハッカーの誕生 141

テクノ・ユートピアとテクノフォビア 144

1970年代のベイエリア 145

キャプテン・克蘭チ 148

プロジェクト・グーテンベルグ 150

情報はフリーになりたがっている 151

ハッカー文化と資本主義 151

まとめ 152

## 終章 崩れ去ったピース&amp;ラブ、そしてカウンターカルチャーが

残したもの…………… 155

1968年 155

ウッドストック 156

チャールズ・マンソン 156

ウェザー・アンダーグラウンド 157

アルタモント・フリー・コンサート 158

ケント州立大学、ジャクソン州立大学の連続悲劇 159

「終わり」の感覚 161

パトリシア・ハースト 162

カウンターカルチャーからニューエイジへ 163

カウンターカルチャーの構造的矛盾 164

反抗的精神の商品化 165

附 章 反逆の大衆化——カウンターカルチャー前史としての	
ビート・ジェネレーション .....	169
分かれる評価	170
アレン・ギンズバーグ	171
ジャック・ケルアック	174
1950年代サンフランシスコとビート・ジェネレーションの誕生	175
「ビート・ジェネレーション」の由来	177
ビートニク	178
ビートニクは反逆か	180
セレブリティとしてのビート	181
ビートの大衆化	182
『オン・ザ・ロード』出版までの紆余曲折	185
現実的に、かつ過激に	187
ビートとカウンターカルチャー	189
増補版あとがき.....	194
あとがき.....	195
文 献.....	196

カウンターカルチャーのアメリカ 第2版  
—希望と失望の1960年代—



## 序 章

# 社会的安定と不安定の はざまに生まれたカウンターカルチャー

アメリカの戦後は大量生産・大量消費による経済繁栄で始まった。好景気の恩恵を受けて、中流階級のアメリカ人は郊外に一軒家を持つことが可能となった。プレハブ方式の住宅が、低コスト・短期間で建てられた。戦前では、一部の金持ちだけが一軒家を所有できたが、戦後になると世間並みの収入で一軒家を買えるようになったのである。最大の貢献者はウィリアム・レヴィット (William Levitt) という不動産会社の社長である。レヴィットは、住宅建築を自動車の組み立てラインに見立てて、あらかじめ出来上がったパーツを現場で組み立てる工法を編み出した。したがって、どの家も似たり寄ったりなのは致し方なかったが、家の購入者にはそんなことは些細な問題だった。

マイホームの夢を実現した家族が次に求めた物は家電製品だった。キッチンには冷蔵庫と電子レンジは必需品だった。ピルズベリー (Pillsbury) などの食品企業が電子レンジで簡単に調理できる製品を発売した。それから洗濯機も必需品だった。洗剤の改良も行われ、温水で洗わないと汚れが落ちなかったのが、冷水でも十分汚れが落ちるようになり、洗濯にかかる労働はかなり軽減された。そして、自動車である。1台ではなく、2台 (夫用と妻用) 持つ家族も珍しくなかった。当時の自動車メーカーは、毎年のようにモデル・チェンジして、購入意欲をそそった。

居間にはテレビが鎮座した。テレビは1960年代半ばには、ほぼ全家庭に普及した。テレビを見れば、ニュース、スポーツ、エンターテインメント、ドラマなどあらゆるものを見、知ることができた。テレビを見ながら家族でそろって夕食という光景は幸福の象徴として、当時のアメリカ人は共有した。テレビ

の出現に対しては、人間の想像力を奪うとか、品性に欠けるアメリカ人を作るなどの否定的な意見を言う批評家が多かった<sup>1)</sup>。テレビの是非論はここでは論じないが、少なくとも次の点は指摘しておきたい。すなわち、テレビはアメリカを集約するようなテイスト形成に貢献したという点である。テレビ局はスポンサーを獲得する必要から、アメリカ人の最大公約数的なテイストを探りながら番組を作った。結果として、番組のジャンルを問わず、テレビはアメリカ人の政治、社会、文化的な最大公約数的なテイストの発掘に尽力したということである。

一軒家を所有することが大衆化したように、高等教育も大衆化した。帰還兵士の社会復帰を助ける目的で制定された G. I. ビル (G. I. Bill) という法律により、兵役を終えたアメリカ人は無償で大学に入学できることができた。これにより、帰還兵士の多くが大学教育を受けることが可能になった。学生を迎える大学側では、教員や教室の確保が追いつかず、講義は 400 人、500 人を収容するような大教室を使うことが当たり前となった。「マス・ソサエティ」「マス・カルチャー」と批判的に呼ばれた大量生産・大量消費のライフ・スタイルは、大学にまで及んだのであった<sup>2)</sup>。

繁栄による安定という時代的風潮に反旗を翻すような動きもあった。とりわけ文化・芸術分野で見られた。美術では、ポップ・アートが誕生した。アンディ・ウォーホル (Andy Warhol)、ジム・ジョーンズ (Jim Jones)、ロイ・リクテンスタイン (Roy Lichtenstein) などが代表的である。これまでの美術の常識ではあり得なかった大量生産品 (たとえば、缶スープやコココーラの瓶) を題材にして、アートの概念を変えたのである。文学ではアレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg) やジャック・ケルアック (Jack Kerouac) などのビート・ジェネレーション作家たちが、自由奔放な文体で、個人を抑圧する体制を批判するような作品を書いた。また、非常に保守的だった性についても、アルフレッド・キンズビー (Alfred Kinsey) の性調査レポートや、ヒュー・ハフナー (Hugh Hefner) の『プレイボーイ』(Playboy) 誌などが風穴を開けた。

1960 年代は華々しく幕を開けた。1960 年 11 月の大統領選で弱冠 43 歳のジョン・F・ケネディ (John F. Kennedy) (民主党) がリチャード・ニクソン

(Richard Nixon) (共和党) に僅差で勝利した。父も国会議員であり、アイルランドに祖先を持つカトリック教徒（注：カトリック教徒であるアイルランド系アメリカ人は、プロテスタントの国アメリカでは差別の対象とされてきた）であるケネディの勝利は、新しい時代を予感させるのに十分すぎるほどのインパクトがあった。

### 公民権運動

ケネディ大統領の任期と重なるように盛んになったのは公民権運動だった。1960年2月、ノース・キャロライナ州グリーンズボロの食堂で、サービスを拒否された4人の黒人学生がデモを行った。当時、特に南部では、飲食を提供する店は、白人専用、黒人専用と分かれているか、座る席で人種を分離していた。この4人の黒人学生は、白人専用のカウンター席に座ったためサービスを拒否されたのだが、ひるまずにサービスを要求し続けた。この様子がテレビで全国中継されると、アメリカ人は否応なしに自国の恥部を認めざるを得なかった。

公民権運動を推進したのは黒人だけでなく、若い世代を中心とした白人も相当数含まれた。同年4月には学生主体のSNCC (Student Nonviolent Coordinating Committee) が、黒人差別撤回を求めて結成された。設立当初のメンバーは黒人が主体だったが、白人大学生の支持を受けて、1964年には会員の半分は白人にまでに拡大した。差別感情が最も激しいとされていた州の1つであるミシシッピ州では、1962年10月に、州最大の公立大学に初の黒人学生ジェームス・メレディス (James Meredith) が入学した。

差別意識や差別システムは簡単に消えなかった。1963年になってもアラバマ州知事ジョージ・ウォレス (George Wallace) はあからさまに黒人差別の正当性を唱えた。州最大の公立大学であるアラバマ大学は依然、黒人の入学を認めなかった。1963年6月には、ミシシッピ州で黒人住民に選挙登録するよう啓蒙活動をしていた1934年結成の人種差別撤廃のための団体NAACP (National Association for the Advancement of Colored People) のメドガー・エヴァース (Medgar Evers) が人種差別を支持する白人によって刺殺された。

公民権運動が最高潮に達したのは、1963年8月のワシントン行進だった。首都ワシントンに人種平等を求める25万人の人びとが集まった。ボブ・ディラン (Bob Dylan) が “Blowin’ in the Wind” を唄い、キング牧師 (Martin Luther King, Jr.) は有名な “I Have a Dream” 演説を行った。

同年11月22日の出来事はアメリカを失意の底に突き落とした。ケネディ大統領暗殺である。演説先のテキサス州ダラスでリー・オズワルド (Lee Oswald) という男によって銃弾に倒れた。国民はテレビ映像で襲撃の瞬間を繰り返し見たことにより、ケネディ暗殺はアメリカ国民の共有記憶となった。ケネディの後を引き継いだジョンソン大統領は、1964年に公民権法 (Civil Rights Act) に署名し、公民権運動は一応の成果を取めた。法律上は、参政権、就職や住宅購入の際の差別撤廃、学校差別のなどの人種平等が実現されたわけである。翌年には大統領の行政命令としてアファーマティブ・アクションの実施に踏み切った。

### キューバ危機、ヴェトナム戦争

公民権法が1960年代の明るいニュースだったとすれば、悪いニュースの筆頭は冷戦体制下の外交問題だった。最初の困難は、海を隔てた隣国キューバへの対応だった。1959年に誕生した反米・親ソヴィエトのカストロ政権に対して、アメリカ政府は圧力をかけた。1962年2月、対キューバ禁輸措置 (食糧、薬は除く) をとる一方で、極秘にキューバ国内の反カストロ勢力に武器援助や訓練を施し、カストロ政権打倒をもくろんだが、さしたる成果を得られなかった。政治的最大の危機は1962年10月に訪れた。アメリカ政府は、ソヴィエトがキューバに原子力爆弾を供給している証拠を掴んだのだった。ケネディは、核弾頭搭載の爆撃機をソヴィエト国境近くに配置し、臨戦態勢を敷いた。

ソヴィエトとの交渉が成立し、キューバ危機は沈静化したものの、アメリカが直面した次なる外交問題はヴェトナムだった。ソヴィエトとの覇権争いで、1つの国が共産主義化すれば隣接する国も次々に共産化してしまうというドミノ理論を前提に外交政策を立てていたアメリカは、アジアにおける共産主義の浸透を阻止するために、ヴェトナム内戦に介入する選択をした。そして、1964

年8月、北ヴェトナムがトンキン湾で米国艦隊を攻撃したことをきっかけに、アメリカ政府はヴェトナムへの本格的軍事介入に踏み切った。

しかし、短期間で終わると思われた戦争はなかなか終わらず、当初は軍事介入を支持した国民のムードも徐々に反戦へと移っていった。最初に反戦の意思を示したのは大学生だった。学生を中心に結成された政治団体 SDS (Students for a Democratic Society) が、1965年4月にヴェトナム軍事介入に反対するためワシントン行進を行ったのを皮切りに、全国のキャンパスでは反戦運動デモが行われるようになった。本書のテーマであるカウンターカルチャーとよばれる対抗文化が始まったのはこのころである。

年が進むにつれ、ヴェトナムの事態は深刻化していった。1968年1月にはソヴィエトの支援を受けた北ヴェトナム軍が、サイゴンを始めとする南ヴェトナムの拠点を次々に攻撃した (テト攻勢 Tet Offensive)。この時点ではすでに、学生だけでなく、国民の多数はこれ以上戦争に関わることは反対だった。戦争継続の責任者として非難にさらされていたロバート・マクナマラ (Robert McNamara) 国防長官は2月に辞任を表明、続いて3月にはジョンソン大統領が北爆の一部中止と同時に、自身の大統領再出馬断念を発表した。

1968年はヴェトナムの戦況悪化だけでなく、国内でもショッキングな出来事が相次いだ。4月にはテネシー州メンフィスで、公民権運動のリーダーだったキング牧師が暗殺された。6月、民主党の大統領候補として有利に選挙戦を展開していたロバート・ケネディ (Robert Kennedy ジョン・F・ケネディの実弟) が暗殺された。8月、シカゴで開かれた民主党大統領候補を正式決定するための党全国大会において、学生デモ隊とシカゴ警察が衝突し、逮捕者を多数出した。10月、任期終了間近のジョンソン大統領は北ヴェトナムに対する攻撃の全面停止を決めた。

## ブラック・パワー

ジョンソン大統領による公民権法成立は偉大な成果であり、社会も差別撤廃の方向に向かい始めたことは評価すべきである。たとえば、1967年6月の最高裁判決は、ヴァージニア州の異人種間結婚禁止の州法を違憲とした。1967

年10月には、黒人初の最高裁判事としてサーグッド・マーシャル（Thurgood Marshall）が任命された。しかし、大統領の署名や、最高裁の違憲判決で、社会がすっかり変わるはずはなかった。黒人コミュニティでは差別に対する長年の鬱積は、依然として残っていた。1965年8月、ロスアンジェルス黒人居住区で暴動が発生した。車を運転していた黒人が警察に職務質問を受けて逮捕されたことに端を発した暴動で、30人を超す死者、4,000人を超える逮捕者を出した（Watts Riots）。警察の嫌がらせや、白人住民の差別に対する感情に端を発する暴動は、デトロイトなど他の都市でも発生した。

依然続く白人の差別に対抗するために、カリフォルニア州オークランド（サンフランシスコと海を挟んで接する町）で1966年10月にブラック・パンサー党（Black Panther Party）が結成された。当初は、警官などから受ける暴力から身を守るための自衛的武力の行使を目的にしていたが、徐々に先鋭化していき、白人との融和より黒人のみのコミュニティを作ろうとした。SNCCは、1964年には白人のメンバーが半分を占めていたが、翌年には白人を組織から追放した。1967年になると、SNCCのリーダー的存在だったストックリー・カーマイケル（Stokely Carmichael）が、「ブラック・パワー」のスローガンを使い始めた。ボクサーのモハメド・アリ（Muhammad Ali）が兵役招集を拒否したのもこの頃である。そのためアリは世界王者の資格を剥奪されただけでなく、ボクサー・ライセンスとパスポートも剥奪されたため、約3年半の間試合をすることができなかった。1968年10月のメキシコシティ・オリンピックで、2人のアメリカ黒人陸上選手がメダル授与式で、ブラック・パワー・サルートと呼ばれる政治的パフォーマンスを行ったとしてメダルを剥奪された。

## 科学の時代

1960年代は科学の時代でもあった。冷戦構造の産物と言ってもよいかもしれないが、アメリカはソヴィエトとの軍備競争に負けるわけにはいかず、おのずと科学分野にたっぷりと予算を充てた。1957年、ソヴィエトの人工衛星スプートニクの打ち上げ成功に慌てたアメリカ政府は、軍備や科学技術、それに科学教育に予算を重点的に配分した。ケネディ大統領はアポロ計画を打ち出

し、月に人類を送る壮大なプロジェクトが始まった。実際にそれは現実となった。1969年7月、ニール・アームストロングほか2人の宇宙飛行士が、人類で初めて月面に足を踏み下ろした。また、ロケット科学が一般庶民の間にも広まった。科学雑誌はロケットに乗って火星や木星に行く可能性を熱く語った。

科学の飛躍的な発展の裏返しとして、環境への関心が高まったのもこの時代だった。1962年出版の『沈黙の春』(*Silent Spring*)で生物学者のレイチェル・カーソン(Rachel Carson)は、防虫剤として使われていたDDTという物質が生態系に及ぼす悪影響について警告した。1969年には、カリフォルニア州南部のサンタバーバラ沖で、石油タンク船の爆発により、原油で海が汚染されるという当時最大の石油汚染事故が起こった。一方では、1968年のアポロ8号が大気圏外から地球の全体写真を撮影したことで、人類は初めて地球を外側から見た。国境や人種の対立を超えて、人類全体で地球環境を守らなければいけないことを悟らせた。このような流れを受けて、1970年4月に初のアース・デイ(Earth Day)が開催され、12月には政府は環境保護庁(Environment Protection Agency)を設立した。

以上のような時代に生まれたのがカウンターカルチャーだった。一言で言いつづけるのは難しいが、カウンターカルチャーとは、既成権力や親の世代の価値観に抵抗して、若い世代のアメリカ人が独自の文化を作った現象を指す。特定の組織や人物によって展開された運動ではなく、多種多様でエキセントリックな文化実践が同時多発的に起こった。たとえば、ロック音楽、ドラッグ、自由な性交渉、コミュニケーション生活などである。彼らの動機は、彼らの親が持っていた人生観、すなわち、なるべく早く結婚して、安定した職に就き、子どもを育てるという規範的人生への反発であり、ひいては、彼らが育ったアメリカの既存システムに対する文化的対抗であった。物質文明に背を向けるようなコミュニケーション生活を営み、ロック音楽に狂喜乱舞し、LSDというドラッグを試しては意識の変容を図った。それから、ヴェトナム反戦運動に積極性に参加した。男も女も長髪を好み、サイケデリックと呼ばれた極彩色の服をまとい、ヘルマン・ヘッセ(Hermann Hesse)の小説、東洋宗教、ネイティブ・アメリカンに関心を寄せた。

彼らはヒッピーと呼ばれた。ヒッピー (hippie) という語は、1965年9月の『サンフランシスコ・エグザミナー』紙で、新世代の若者文化を紹介した特集記事の中で使われたのが最初であるとされている。ヒップ (hip) という、知的でありながら、無難よりも大胆さ、快適よりも快楽を優先するような生き方をする感性的に飛び抜けた人間をさす語をもじったものである。ヒッピーたちは理論武装したわけではなかった。彼らの文化的闘争を理論的に支援する研究者はいたが、ヒッピー自身は自らの感性にしたがって行動したにすぎない。しかし、カウンターカルチャーは根源的な問いかけをアメリカに対して提起した。彼らが提起したのは、アメリカの価値観に関わる対抗運動だった<sup>3)</sup>。

本書は1960年代後半にアメリカで起こったカウンターカルチャーの概説書である。第一部では、カウンターカルチャーを特徴づけた代表的な5つの文化運動について考察する。第1章は、カウンターカルチャーの代名詞的存在感を示したロック音楽を考察する。1950年代半ばに登場したロックンロールから1960年代終わりのサイケデリック・ロックまでの歴史を簡単に振り返りながら、ロックの何がヒッピーたちを夢中にさせたのかを論じる。ロックとは、単なる娯楽のためのポピュラー音楽ではなく、彼らの社会観が凝縮された芸術形式であった。さらに、アメリカが抱えていた人種差別の問題や、ちょうど同時期に盛んになったフェミニズムが提起した問題に対して、音楽的に答えを提出する役目も果たした。

第2章はLSDを扱う。戦後のアメリカ社会では、科学の力によって精神をコントロールできるという考えが支配していた。アルコール消費や精神科医の増加などはそのことを証明する。LSDに関しても、この薬物がヒッピーたちに渡る1960年代以前は、医師の指導のもとで治療薬として使われていたという事実はあまり知られていない。LSDは、したがって、ヒッピーたちによる奇異な文化風習として考えるよりも、戦後アメリカを支配した「精神」に対する態度の一形態として理解する方がよい。

第3章では、演劇という芸術形式がカウンターカルチャーの進展に従い、過激化する過程を追う。サンフランシスコでは、カウンターカルチャー以前か

ら、サンフランシスコ・マイム・トループ (San Francisco Mime Troupe) という社会風刺劇団が活動していた。やがて、同劇団は分裂して、一方はディッカーズ (Diggers) と名乗り、食事や生活必需品を無料で配給する活動を始めた。ユートピア思想にとりつかれ、資本主義を否定するようなディッカーズの活動に刺激を受けて、ニューヨークで YIP (Youth International Party) とよばれるグループができた。本格的な反政府組織にはほど遠かったが、アメリカというシステムの転覆を図った YIP は、1968 年の民主党全国大会やその後も幾度か反社会的な示威行動を行った。第 3 章はこれらの 3 つのグループに焦点を絞り、詳述する。

第 4 章は、カウンターカルチャー後期に現れたコミュニン・ブームについて考える。コミュニンとは、自給自足と精神的な充実を求めたヒッピーたちが、都会を離れて、農村地帯で農作業をしながら集団生活をしたことを指すのだが、現実は甘くはなかった。ほとんどのコミュニンは短期間で解散した。全体としてコミュニン運動は失敗に終わったものの、その意義は過小評価するべきではないということを、第 4 章では述べていきたい。

第 5 章は、東洋文化とカウンターカルチャーの関係を考える。アメリカの本流をなす生活様式になじめなかったヒッピーたちは、非アメリカ的なものに憧れる傾向があった。その代表的なものが東洋文化への関心だった。たとえば、禅、仏教、ヒンズー教、そしてヘルマン・ヘッセの小説だった。さらには、もっと身近なネイティヴ・アメリカン文化への接近もあった。ヒッピーたちは、これらの非主流文化への接近をつうじて、アメリカに対する批判精神と自らの文化的アイデンティティを形成していった。

第二部では、カウンターカルチャー圏外で起こった現象でありながら、カウンターカルチャーと同時代的で密接な関連をもつ 3 つのテーマを考察する。映画、ジャーナリズム、そしてパーソナル・コンピューターである。なぜ、カウンターカルチャーと直接関係のないテーマを扱うのかと言えば、カウンターカルチャーは大学生世代が起こした特異な一過性の現象ではなく、アメリカ社会が変革していく過程で現れた一つの象徴的出来事だったからである。第 6 章で論じるインディペンデント・シネマは、ハリウッドが起死回生をかけて生み

出した新しいジャンルである。『卒業』や『イージー・ライダー』などのヒット作品は、カウンターカルチャー的な素材を盛り込むことで、映画館から遠ざかっていた若い観客層を取り戻すことに成功した。この商業的成功は何を意味するのかを考えるのが第6章の目的である。

第7章は、ニュー・ジャーナリズムの代表的作品を幾つか取り上げて、カウンターカルチャーとの親和性を論じる。映画産業が変革を求められたように、ジャーナリズム界も従来の執筆手法が読者にアピールしなくなっていることに危機感を抱いていた。そこで、1960年代後半にニュー・ジャーナリズムと呼ばれた作品が、主流雑誌に相次いで掲載されるようになった。第7章では、具体的な作品をつうじてニュー・ジャーナリズムの特徴を詳述するとともに、作家たちの問題意識が、カウンターカルチャーを作ったヒッピーたちのそれと近かったことを論じる。

最後の第8章は、パーソナル・コンピューターの誕生を扱う。本書の主張は、カウンターカルチャーは真性の反権力文化ではなく、メインストリームと二人三脚の関係をもつ文化様式だったということであるが、パーソナル・コンピューターの誕生は、この主張をもっとも直接に具現化した。パーソナル・コンピューターが製品化されるのは1970年代の終わりであり、本書が対象とするカウンターカルチャーの時代より少し後だが、パーソナル・コンピューター誕生に貢献した人びとの多くはカウンターカルチャーの影響を強く受けた。だから、製品として日の目を見るのは1970年代終わりであるという事実はあるにせよ、本書の締めくくりの章とするにふさわしいと判断した。

本書に出てくる多くの出来事はサンフランシスコとその近郊のベイエリアと呼ばれる地域で起きた。サンフランシスコには、ヒッピーと呼ばれた若者が多く集まり、独特の文化圏を作る一方で、そこで生まれた音楽やファッションなどが商品としてマーケットをつうじて全国に流通した。もちろん、ベイエリア以外にも、注目すべきカウンターカルチャー現象は見られたし、そういう幾つかは本書でも取り上げる。それでもなお、カウンターカルチャーは、サンフランシスコで始まりサンフランシスコで終わったというのが大方の理解であるので、本書も通説にしたがひ、サンフランシスコを中心とした記述方針を採用

することにした。

カウンターカルチャーを一言で表現するのは、ほとんど不可能な試みである。なぜなら、起きた現象については非常に多様な価値観を読み取ることができるからである。片方には、労働や経済原理を無視したディッガーズやコミュニケーション・ヒッピーがいれば、もう片方にはヒッピーを相手に音楽や雑誌を売り、金を稼いだ者もいた。YIPのように、メディアを我が庭のように利用し、体制転覆（らしきこと）を計った者も出てきた。これらすべての現象に共通する原理・思想を見つけることはできそうにない。

しかしながら、この時代のアメリカ社会を大きな枠組みで見ると、カウンターカルチャーは1つの運動として、その存在感を発揮した。1960年代後半のカウンターカルチャーを作ったヒッピーたちが提示したのは、高度に発展した資本主義社会において、社会変革はいかにして可能かという大きなテーマだったからである。ダニエル・ベル（Daniel Bell）という社会学者は、この時代のアメリカの問題を「資本主義の文化的矛盾」と名付けたが、戦後アメリカ社会の矛盾を十分認識し、いくつかの解決策を提示したのがカウンターカルチャーだった。ヒッピー自身は、そこまで大きなヴィジョンを持っていたとは限らないが、後から振り返れば、ヒッピーたちのやろうとしていたことは、アメリカの根本的な問題に切り込んだことが分かる。そのあたりの具体的なことを、各章で論じていく。

#### 注

- 1) もっとも初期の批判に、Norman Cousins, "The Time Trap," *Saturday Review of Literature* (December 24, 1949), 20.
- 2) Terry H. Anderson, *The Movement and The Sixties: Protest in America from Greensboro to Wounded Knee* (Cambridge: Oxford University Press, 1996), 97.
- 3) David Farber, *The Age of Great Dreams: America in the 1960s* (New York: Hill and Wang, 1994), 168.